魚玄機

森鷗外

魚玄機(ぎょげんき)が人を殺して獄に下った。風説は忽(たちま)ち長安人士の間に流伝せられて、一人として事の意表に出でたのに驚かぬものはなかった。

唐(とう)の代(よ)には道教が盛であった。それは道士等(どうしら)が王室の李(り)姓であるのを奇貨として、老子を先祖だと言い做(な)し、老君に仕うること宗廟(そうびょう)に仕うるが如(ごと)くならしめたためである。天宝以来西の京の長安には太清宮(たいせいきゅう)があり、東の京の洛陽(らくよう)には太微宮(たいびきゅう)があった。その外(ほか)都会ごとに紫極宮(しきょくきゅう)があって、どこでも日を定めて厳かな祭が行われるのであった。長安には太清宮の下(しも)に許多(いくた)の楼観がある。道教に観があるのは、仏教に寺がある

のと同じ事で、寺には僧侶（そうりょ）が居（お）り、観には道士が居る。その観の一つを咸宜観（かんぎかん）と云って女道士（じょどうし）魚玄機はそこに住んでいたのである。

玄機は久しく美人を以て聞えていた。趙痩（ちょうそう）と云わむよりは、むしろ楊肥（ようひ）と云うべき女である。それが女道士になっているから、脂粉の顔色を涴（けが）すを嫌っていたかと云うと、そうではない。平生粧（よそおい）を凝（こら）し容（かたち）を冶（かざ）っていたのである。獄に下った時は懿宗（いそう）の咸通（かんつう）九年で、玄機は恰（あたか）も二十六歳になっていた。

玄機が長安人士の間に知られていたのは、独り美人として知られていたのみではない。この女は詩を善（よ）く

した。詩が唐の代に最も隆盛であったことは言を待たない。隴西(ろうせい)の李白(りはく)、襄陽(じょうよう)の杜甫(とほ)が出て、天下の能事を尽した後に太原(たいげん)の白居易(はくきょい)が踵(つ)いで起って、古今の人情を曲尽(きょくじん)し、長恨歌(ちょうこんか)や琵琶行(びわこう)は戸ごとに誦(そら)んぜられた。

白居易の亡くなった宣宗(せんそう)の大中(たいちゅう)元年に、玄機はまだ五歳の女児であったが、ひどく怜悧(れいり)で、白居易は勿論(もちろん)、それと名を斉(ひと)しゅうしていた元微之(げんびし)の詩をも、多く暗記して、その数は古今体を通じて数十篇に及んでいた。十三歳の時玄機は始て七言絶句を作った。それから十五歳の時には、もう魚家の少女の詩と云うものが好事者(こうずしゃ)の間に写し伝えられることがあったのである。

そう云う美しい女詩人が人を殺して獄に下ったのだから、当時世間の視聴を聳動（しょうどう）したのも無理はない。

魚玄機の生れた家は、長安の大道から横に曲がって行く小さい街にあった。所謂狭邪（いわゆるきょうしゃ）の地でどの家にも歌女（かじょ）を養っている。魚家もその倡家（しょうか）の一つである。玄機が詩を学びたいと言い出した時、両親が快く諾して、隣街の窮措大（きゅうそだい）を家に招いて、平仄（ひょうそく）や押韻の法を教え

させたのは、他日この子を揺金樹(ようきんじゅ)にしようと云う願があったからである。

　大中十一年の春であった。魚家の妓(ぎ)数人が度々ある旗亭(きてい)から呼ばれた。客は宰相令狐綯(れいことう)の家の公子で令狐※［＃「さんずい＋高」、195-7］(れいこかく)と云う人である。貴公子仲間の斐誠(ひせい)がいつも一しょに来る。それに今一人の相伴があって、この人は温姓(おんせい)で、令狐や斐に鍾馗(しょうき)々々と呼ばれている。公子二人は美服しているのに、温は独り汚れ垢(あか)ついた衣(きぬ)を着ていて、兎角(とかく)公子等に頤使(いし)せられるので、妓等は初め僮僕(どうぼく)ではないかと思った。然(しか)るに酒　酣(たけなわ)に耳熱して来ると、温鍾馗は二公子を白眼

に視(み)て、叱咤(しった)怒号する。それから妓に琴を弾かせ、笛を吹かせて歌い出す。かつて聞いたことのない、美しい詞(ことば)を朗かな声で歌うのに、その音調が好く整っていて、しろう人(と)とは思われぬ程である。鍾馗の諢名(あだな)のある于思盱目(うさいかんもく)の温が、二人の白面郎に侮られるのを見て、嘲謔(ちょうぎゃく)の目標にしていた妓等は、この時温の傍(そば)に一人寄り二人寄って、とうとう温を囲んで傾聴した。この時から妓等は温と親しくなった。温は妓の琴を借りて弾いたり、笛を借りて吹いたりする。吹弾(すいたん)の技も妓等の及ぶ所ではない。

妓等が魚家に帰って、頻(しきり)に温の噂(うわさ)をするので、玄

機がそれを聞いて師匠にしている措大に話すと、その男が驚いて云った。「温鍾馗と云うのは、恐らくは太原の温岐の事だろう。またの名は庭筠、字は飛卿である。挙場にあって八たび手を叉けば八韻の詩が成るので、温八叉と云う諢名もある。鍾馗と云うのは、容貌が醜怪だから言うのだ。当今の詩人では李商隠を除いて、あの人の右に出るものはない。この二人に段成式を加えて三名家と云っているが、段はやや劣っている」と云った。

それを聞いてからは、妓等が令狐の筵会から帰る毎に、玄機が温の事を問う。妓等もまた温に逢う毎に玄

機の事を語るようになった。そしてとうとうある日温が魚家に訪ねて来た。美しい少女が詩を作ると云う話に、好奇心を起したのである。

温と玄機とが対面した。温の目に映じた玄機は将（まさ）に開かむとする牡丹（ぼたん）の花のような少女である。温は貴公子連と遊んではいるが、もう年は四十に達して、鍾馗の名に負（そむ）かぬ容貌をしている。開成の初に妻を迎えて、家には玄機とほとんど同年になる憲と云う子がいる。

玄機は襟（えり）を正して恭（うやうや）しく温を迎えた。初め妓等に接するが如き態度を以て接しようとした温は、覚えず容（かたち）を改めた。さて語を交えて見て、温は直に玄機が

尋常の女でないことを知った。何故（なぜ）と云うに、この花の如き十五歳の少女には、些（ちと）の嬌羞（きょうしゅう）の色もなく、その口吻（こうふん）は男子に似ていたからである。

温は云った。「卿（けい）の詩を善くすることを聞いた。近業があるなら見せて下さい」と云った。

玄機は答えた。「児（じ）は不幸にして未（いま）だ良師を得ません。どうして近業の言うに足るものがありましょう。今伯楽（はくらく）の一顧を得て、奔蹄（ほんてい）して千里を致すの思があります。願わくは題を課してお試み下さい」と云ったのである。

温は微笑を禁じ得なかった。この少女が良驥（りょうき）を以て

自ら比するのは、いかにもふさわしくないように感じたからである。

玄機は起(た)って筆墨を温の前に置いた。温は卒然「江辺柳」の三字を書して示した。玄機が暫(しば)く考えて占出(せんしゅつ)した詩はこうである。

賦得江辺柳

翠色連荒岸。(すゐしよくくわうがんにつらなり)
烟姿入遠楼。(えんしゑんろうにいる)
影鋪秋水面。(かげはしうすゐのおもてにのべ)
花落釣人頭。(はなはつりびとのかうべにおつ)
根老蔵魚窟。(ねはおいてぎよくつかくれ)
枝低繫客舟。(えだはひくくきやくしうつながる)
蕭々風雨夜。(せうせうたりふううのよ)
驚夢復添愁。(ゆめよりさめてまたうれひをそふ)

温は一誦(しょう)して善(よ)しと称した。温はこれまで七たび

挙場に入った。そして毎(つね)に堂々たる男子が苦索して一句を成し得ないのを見た。彼輩(かのはい)は皆遠くこの少女に及ばぬのである。

此を始として温は度々魚家を訪ねた。二人の間には詩筒(しとう)の往反(おうへん)織るが如くになった。

温は大中元年に、三十歳で太原(たいげん)から出て、始て進士の試(し)に応じた。自己の詩文は燭(しょく)一寸を燃(もや)さぬうちに

成ったので、隣席のものが呻吟（しんぎん）するのを見て、これに手を仮（か）して遣（や）った。その後挙場に入る毎に七八人のために詩文を作る。その中には及第するものがある。ただ温のみはいつまでも及第しない。

　これに反して場外の名は京師（けいし）に騒いで、大中四年に宰相になった令狐綯も、温を引見して度々筵席に列せしめた。ある日席上で綯が一の故事を問うた。それは荘子（そうし）に出ている事であった。温が直ちに答えたのは好（い）いが、その詞（ことば）は頗（すこぶ）る不謹慎であった。「それは南華に出ております。余り僻書（へきしょ）ではございません。相公（しょうこう）も燮理（しょうり）の暇（いとま）には、時々読書をもなさるが宜（よろ）しゅうご

ざいましょう」と云ったのである。
また宣宗が菩薩蛮(ぼさつばん)の詞を愛するので、綯が塡詞(てんし)して上(たてまつ)った。実は温に代作させて口止をして置いたのである。然るに温は酔ってその事を人に漏した。その上かつて「中書堂内坐将軍(ちゆうしよだうないしやうぐんをざせしむ)」と云ったことがある。綯が無学なのを譏(そし)ったのである。
温の名は遂(つい)に宣宗にも聞えた。それはある時宣宗が一句を得て対を挙人中に求めると、温は宣宗の「金歩揺(きんほよう)」に対するに「玉条脱(ぎよくじようだつ)」を以てして、帝に激賞せられたのである。然るに宣宗は微行をする癖があって、温の名を識(し)ってから間もなく、旗亭で温に

邂逅（かいこう）した。温は帝の顔を識らぬので、暫く語を交えているうちに傲慢（ごうまん）無礼の言をなした。

既にして挙場では、沈詢（ちんじゅん）が知挙になってから、温を別席に居らせて、隣に空席を置くことになった。詩名はいよいよ高く、帝も宰相もその才を愛しながら、その人を鄙（いやし）んだ。趙顓（ちょうせん）の妻になっている温の姉などは、弟のために要路に懇請したが、何の甲斐（かい）もなかった。

温の友に李億（りおく）と云う素封家があった。年は温より十ばかりも少くて頗る（すこぶる）詞賦（しふ）を解していた。

咸通（かんつう）元年の春であった。久しく襄陽（じょうよう）に往っていた温が長安に還（かえ）ったので、李がその寓居（ぐうきょ）を訪ねた。襄陽では、温は刺史（しし）徐商（じょしょう）の下（もと）で小吏になって、やや久しく勤めていたが、終（つい）に厭倦（えんけん）を生じて罷（や）めたのである。

温の机の上に玄機の詩稿があった。李はそれを見て歎称（たんしょう）した。そしてどんな女かと云った。温は三年前から詩を教えている、花の如き少女だと告げた。それを聞くと、李は精（くわ）しく魚家のある街（まち）を問うて、何か思うことありげに、急いで座を起った。

李は温の所を辞して、径(ただ)ちに魚家に往(い)って、玄機を納(い)れて側室にしようと云った。玄機の両親は幣(へい)の厚いのに動かされた。

玄機は出(いで)て李と相見た。今年はもう十八歳になっている。その容貌の美しさは、温の初て逢った時の比ではない。李もまた白皙(はくせき)の美丈夫(びじょうふ)である。李は切に請い、玄機は必ずしも拒まぬので、約束は即時に成就して、数日の後に、李は玄機を城外の林亭(りんてい)に迎え入れた。

この時李は遽(にわか)に発した願が遽に愜(かな)ったように思った。しかしそこに意外の障礙(しょうがい)が生じた。それは李が身を以て、近(ちかづ)こうとすれば、玄機は回避して、強いて

逼れば号泣するのである。林亭は李が夕に望を懐いて往き、朝に興を失って還るの処となった。

李は玄機が不具ではないかと疑って見た。しかしもしそうなら、初に聘を卻けたはずである。李は玄機に嫌われているとも思うことが出来ない。玄機は泣く時に、一旦避けた身を李に靠せ掛けてさも苦痛に堪えぬらしく泣くのである。

李はしばしば催してかつて遂げぬ欲望のために、徒らに精神を銷磨して、行住座臥の間、恍惚として失する所あるが如くになった。

李には妻がある。妻は夫の動作が常に異なるのを見

て、その去住に意を注いだ。そして僮僕（どうぼく）に啗（くら）わしめて、玄機の林亭にいることを知った。夫妻は反目した。ある日岳父が婿（むこ）の家に来て李を面責し、李は遂に玄機を逐（お）うことを誓った。

李は林亭に往って、玄機に魚家に帰ることを勧めた。しかし魚は聴かなかった。縦令（たとい）二親（ふたおや）は寛仮するにしても、女伴（じょはん）の侮（あなどり）を受けるに堪えないと云うのである。そこで李は兼（かね）て交っていた道士趙錬師（ちょうれんし）を請待（しょうだい）して、玄機の身の上を託した。玄機が咸宜観に入って女道士になったのは、こうした因縁である。

玄機は才智に長（た）けた女であった。その詩には人に優れた剪裁（せんさい）の工（たくみ）があった。温を師として詩を学ぶことになってからは、一面には典籍の渉猟に努力し、一面には字句の錘錬（ついれん）に苦心して、ほとんど寝食を忘れる程であった。それと同時に詩名を求める念が漸（ようや）く増長した。

李に聘せられる前の事である。ある日玄機は崇真観（しゅうしんかん）に往って、南楼に状元（じょうげん）以下の進士等が名を題

したのを見て、慨然として詩を賦(ふ)した。

遊崇真観南楼。(しゅうしんくわんのなんろうにあそび)　観新及第題名処。(しんきふだいのなをだいせしところをみる)
雲峯満目放春晴。(うんぽうまんもくしゅんせいをはなち)　歴々銀鈎指下生。(れきれきたるぎんこうかせいをさす)
自恨羅衣掩詩句。(みづからうらむらいのしくをおほふを)　挙頭空羨榜中名。(かうべをあげてむなしくばうちゅうのなをうらやむ)

玄機が女子の形骸(けいがい)を以て、男子の心情を有していたことは、この詩を見ても推知することが出来る。しかしその形骸が女子であるから、吉士(きっし)を懐(おも)うの情がないことはない。ただそれは蔓草(つるくさ)が木の幹に纏(まと)い附こうとするような心であって、房帷(ぼうい)の欲ではない。玄機は彼があったから、李の聘に応じたのである。此(これ)がなかったから、林亭の夜は索莫(さくばく)であったのである。

既にして玄機は咸宜観に入った。李が別に臨んで、衣食に窮せぬだけの財を餽(おく)ったので、玄機は安んじて観内で暮らすことが出来た。趙が道書を授けると、玄機は喜んでこれを読んだ。この女のためには経(けい)を講じ史を読むのは、家常の茶飯であるから、道家の言が却(かえ)ってその新を趁(お)い奇を求める心を悦(よろこ)ばしめたのである。

当時道家には中気真術と云うものを行う習(ならい)があった。毎月朔望(さくぼう)の二度、予め三日の斎(ものいみ)をして、所謂(いわゆる)四目四鼻孔云々(うんぬん)の法を修するのである。玄機は逭(のが)るべからざる規律の下(もと)にこれを修すること一年余にして忽然(こつぜん)悟入する所があった。玄機は真に女子になって、李の

林亭にいた日に知らなかった事を知った。これが咸通二年の春の事である。

玄機は共に修行する女道士中のやや文字ある一人と親しくなって、これと寝食を同じゅうし、これに心胸を披瀝（ひれき）した。この女は名を采蘋（さいひん）と云った。ある日玄機が采蘋に書いて遣（や）った詩がある。

贈隣女（りんぢよにおくる）

羞日遮羅袖（ひをさけてらしうもてさへぎる）。　愁春懶起粧（はるをうれひてきしやうするにものうし）。
易求無価宝（もとめやすきはあたひなきたから）。　難得有心郎（えがたきはこゝろあるらう）。
枕上潜垂涙（ちんじやうひそかになみだをながし）。　花間暗断腸（くわかんひそかにはらわたをたつ）。
自能窺宋玉（みづからよくそうぎよくをうかゞふ）。　何必恨王昌（なんぞかならずしもわうしやうをうらまん）。

采蘋は体が小くて軽率であった。それに年が十六で、もう十九になっている玄機よりは少（わか）いので、始終沈重（ちんちょう）な玄機に制馭（せいぎょ）せられていた。そして二人で争うと、いつも采蘋が負けて泣いた。そう云う事は日毎にあった。しかし二人は直（ただち）にまた和睦（わぼく）する。女道士仲間では、こう云う風に親しくするのを対食と名づけて、傍（かたわら）から揶揄（やゆ）する。それには羨（せん）と妬（と）とも交（まじ）っているの

である。
秋になって采蘋は忽失踪（たちまちしっそう）した。それは趙の所で塑像を造っていた旅の工人が、暇（いとま）を告げて去ったのと同時であった。前に対食を嘲（あざけ）った女等が、趙に玄機の寂しがっていることを話すと、趙は笑って「蘋也飄蕩（ひんやへうたう）、蕙也幽独（けいやいうどく）」と云った。玄機は字（あざな）を幼微と云い、また蕙蘭（けいらん）とも云ったからである。

趙は修法の時に規律を以て束縛するばかりで、楼観の出入などを厳にすることはなかった。玄機の所へは、詩名が次第に高くなったために、書を索(もと)めに来る人が多かった。そう云う人は玄機に金を遣ることもある。物を遣ることもある。中には玄機の美しいことを聞いて、名を索書に藉(か)りて訪(と)うものもある。ある士人は酒を携えて来て玄機に飲ませようとすると、玄機は僮僕(どうぼく)を呼んで、その人を門外に逐(お)い出させたそうである。

然るに采蘋が失踪した後、玄機の態度は一変して、やや文字を識る士人が来て詩を乞(こ)い書を求めると、それを留(とど)めて茶を供し、笑語晷(しょうごひかげ)を移すことがある。一

たび款待（かんたい）せられたものは、友を誘（いざな）って再び来る。玄機が客（かく）を好むと云う風聞は、幾（いくばく）もなくして長安人士の間に伝わった。もう酒を載せて尋ねても、逐われる虞（おそれ）はなくなったのである。

　これに反して徒（いたずら）に美人の名に誘われて、目に丁字（ていじ）なしと云う輩（やから）が来ると、玄機は毫（ごう）も仮借せずに、これに侮辱を加えて逐い出してしまう。熟客（じゅっかく）と共に来た無学の貴介子弟（きかいしてい）などは、幸（さいわい）にして謾罵（まんば）を免れることが出来ても、坐客があるいは句を聯（つら）ねあるいは曲を度する間にあって、自（みずか）ら視（み）て欠然たる処から、独り窃（ひそか）に席を逃れて帰るのである。

客と共に謔浪（ぎゃくろう）した玄機は、客の散じた後に、快々（おうおう）として楽まない。夜が更けても眠らずに、目に涙を湛（たた）えている。そう云う夜旅中の温に寄せる詩を作ったことがある。

寄飛卿（ひけいによす）

※砌乱蛩鳴（かいぜいらんきょうなき）［＃「土へん＋皆」、205-11］。

庭柯烟露清（ていかえんろきよし）。

月中(げっちゅう)隣楽(りんがく)響(ひゞき)。　楼上(ろうじやう)遠山(ゑんざん)明(あきらかなり)。
珍簟(ちんてん)涼風(にりやうふう)到(いたり)。　瑶琴(えうきん)寄恨(にきこん)生(うまる)。
嵇君(けいくん)懶書札(しよさつにものうし)。　底物(なにごとぞ)慰秋情(しうじやうをなぐさめん)。

玄機は詩筒を発した後、日夜温の書の来(きた)るのを待った。さて日を経て温の書が来ると、玄機は失望したように見えた。これは温の書の罪ではない。玄機は求むる所のものがあって、自らその何物なるかを知らぬのである。

ある夜玄機は例の如く、燈(ともしび)の下(もと)に眉を蹙(ひそ)めて沈思していたが、漸(ようや)く不安になって席を起ち、あちこち室内を歩いて、机の上の物を取っては、また直(すぐ)に放下し

などしていた。やや久しゅうして後、玄機は紙を展(の)べて詩を書いた。それは楽人陳某(ちんぼう)に寄せる詩であった。陳某は十日ばかり前に、二三人の貴公子と共にただ一度玄機の所に来たのである。体格が雄偉で、面貌(めんぼう)の柔和な少年で、多く語らずに、始終微笑を帯びて玄機の挙止を凝視していた。年は玄機より少(わか)いのである。

感懐寄人(かんくわいひとによす)

恨寄朱絃上。(うらみをしゆげんのうへによせ)　含情意不任。(じやうをふくめどもいまかせず)

早知雲雨会。(はやくもしるうんうのくわいするを)　未起蕙蘭心。(いまだおこさずけいらんのこゝろ)

灼々桃兼李。(しやく〳〵たるもゝとすもゝ)　無妨国士尋。(こくしのたづぬるをさまたぐるなし)

蒼々松与桂。　仍羨世人欽。
月色庭階浄。
歌声竹院深。　門前紅葉地。　不掃待知音。

陳は翌日詩を得て、直に咸宜観に来た。玄機は人を屏けて引見し、僮僕に客を謝することを命じた。玄機の書斎からはただ微かに低語の声が聞えるのみであった。初夜を過ぎて陳は辞し去った。これからは陳は姓名を通ぜずに玄機の書斎に入ることになり、玄機は陳を迎える度に客を謝することになった。

陳の玄機を訪(と)うことが頻(しきり)なので、客は多く卻(しりぞ)けられるようになった。書を索(もと)めるものは、ただ金を贈って書を得るだけで、満足しなくてはならぬことになったのである。

一月ばかり後に、玄機は僮僕に暇(いとま)を遣(や)って、老婢(ろうひ)一人を使うことにした。この醜悪な、いつも不機嫌な媼(おうな)はほとんど人に物を言うこともないので、観内の状況は世間に知られることが少く、玄機と陳とは余り人に煩聒(はんかつ)せられずにいることが出来た。

陳は時々旅行することがある。玄機はそう云う時にも客を迎えずに、籠居（ろうきょ）して多く詩を作り、それを温に送って政を乞うた。温はこの詩を受けて読む毎に、語中に閨人（けいじん）の柔情（じゅうじょう）が漸く多く、道家の逸思がほとんど無いのを見て、訝（いぶか）しげに首を傾けた。玄機が李の妾（しょう）になって、幾（いくばく）もなく李と別れ、咸宜観に入って女道士になった顚末（てんまつ）は、悉（ことごと）く李の口から温の耳に入っていたのである。

七年程の月日が無事に立った。その時夢にも想わぬ災害が玄機の身の上に起って来た。

咸通八年の暮に、陳が旅行をした。玄機は跡に残って寂しく時を送った。その頃温に寄せた詩の中に、「満庭木葉愁風起、透幌紗窓惜月沈」と云う、例に無い悽惨な句がある。

九年の初春に、まだ陳が帰らぬうちに、老婢が死んだ。親戚の恃むべきものもない媼は、兼て棺材まで準備していたので、玄機は送葬の事を計らって遣った。その跡へ緑翹と云う十八歳の婢が来た。顔は美しく

はないが、聡慧（そうけい）で媚態（びたい）があった。

陳が長安に帰って咸宜観に来たのは、艶陽三月の天であった。玄機がこれを迎える情は、渇した人が泉に臨むようであった。暫らくは陳がほとんど虚日のないように来た。その間に玄機は、度々陳が緑翹を揶揄（やゆ）するのを見た。しかし玄機は初め意に介せなかった。なぜと云うに、玄機の目中には女子としての緑翹はないと云って好（よ）い位であったからである。

玄機は今年二十六歳になっている。眉目（びもく）端正な顔が、迫り視（み）るべからざる程の気高い美しさを具えて、新（あらた）に浴を出た時には、琥珀色（こはくいろ）の光を放っている。豊かな

肌は瑕のない玉のようである。緑翹は額の低い、頤の短い猧子に似た顔で、手足は粗大である。領や肘はいつも垢膩に汚れている。玄機に緑翹を忌む心のなかったのは無理もない。

そのうち三人の関係が少しく紛糾して来た。これまでは玄機の挙措が意に満たぬ時、陳は寡言になったり、または全く口を噤んでいたりしたのに、今は陳がそう云う時、多く緑翹と語った。その上そう云う時の陳の詞は極て温和である。玄機はそれを聞く度に胸を刺されるように感じた。

ある日玄機は女道士仲間に招かれて、某の楼観に

往った。書斎を出る時、緑翹にその観の名を教えて置いたのである。さて夕方になって帰ると、緑翹が門（かど）に出迎えて云った。「お留守に陳さんがお出（いで）なさいました。お出になった先を申しましたら、そうかと云ってお帰なさいました」と云った。

玄機は色を変じた。これまで留守の間に陳の来たことは度々あるが、いつも陳は書斎に入って待っていた。それに今日は程近い所にいるのを知っていて、待たずに帰ったと云う。玄機は陳と緑翹との間に何等かの秘密があるらしく感じたのである。

玄機は黙って書斎に入って、暫く坐（ざ）して沈思してい

た。猜疑（さいぎ）は次第に深くなり、忿恨（ふんこん）は次第に盛んになった。門に迎えた緑翹の顔に、常に無い侮蔑（ぶべつ）の色が見えたようにも思われて来る。温言を以て緑翹を賺（すか）す陳の声が歴々として耳に響くようにも思われて来る。

そこへ緑翹が燈（ともしび）に火を点じて持って来た。何気なく見える女の顔を、玄機は甚だしく陰険なように看取した。玄機は突然起って扉に鎖（じょう）を下した。そして震（ふる）う声で詰問しはじめた。女はただ「存じません、存じません」と云った。玄機にはそれが甚しく狡獪（こうかい）なように感ぜられた。玄機は床の上に跪（ひざまず）いている女を押し倒した。女は慴（おそ）れて目を瞪（みは）っている。「なぜ白状しな

いか」と叫んで玄機は女の吭(のど)を扼(やく)した。女はただ手足をもがいている。玄機が手を放して見ると、女は死んでいた。

　玄機の緑翹を殺したことは、やや久しく発覚せずにいた。殺した翌日陳の来た時には、玄機は陳が緑翹の事を問うだろうと予期していた。しかし陳は問わなかった。玄機がとうとう「あの緑翹がゆうべからいな

くなりましたが」と云って陳の顔色を覗(うかが)うと、陳は「そうかい」と云っただけで、別に意に介せぬらしく見えた。玄機は前夜のうちに観の背後(うしろ)に土を取った穴のある処へ、緑翹の屍(かばね)を抱いて往って、穴の中へ推し墜(おと)して、上から土を掛けて置いたのである。

玄機は「生ける秘密」のために、数年前から客を謝していた。然るに今は「死せる秘密」のために懼(おそれ)を懐(いだ)いて、もし客を謝したら、緑翹の踪跡(そうせき)を尋ねるものが、観内に目を著(つ)けはすまいかと思った。そこで切(せつ)に会見を求めるものがあると、強いて拒まぬことにした。

初夏の頃に、ある日二三人の客があった。その中の

一人が涼を求めて観の背後に出ると、土を取った跡らしい穴の底に新しい土が填（う）まっていて、その上に緑色に光る蠅（はえ）が群がり集まっていた。その人はただなんとなく訝（いぶか）しく思って、深い思慮をも費さずに、これを自己の従者に語った。従者はまたこれを兄に語った。兄は府の衙卒（がそつ）を勤めているものである。この卒は数年前に、陳が払暁に咸宜観から出るのを認めたことがある。そこで奇貨措（お）くべしとなして、玄機を脅（おびやか）して金を獲（え）ようとしたが、玄機は笑って顧みなかった。卒はそれから玄機を怨んでいた。今弟の語（ことば）を聞いて、小婢（しょうひ）の失踪したのと、土穴に腥羶（せいせん）の気があるのとの間に、何

等かの関係があるように思った。そして同班の卒数人と共に、鍤（すき）を持って咸宜観に突入して、穴の底を掘った。緑翹の屍は一尺に足らぬ土の下に埋まっていたのである。

京兆（けいちょう）の尹（いん）温璋（おんしょう）は衙卒の訴に本（もと）づいて魚玄機を逮捕させた。玄機は毫（ごう）も弁疏（べんそ）することなくして罪に服した。楽人陳某は鞫問（きくもん）を受けたが、情を知らざるものとして釈（ゆる）された。

李億を始（はじめ）として、かつて玄機を識っていた朝野の人士は、皆その才を惜んで救おうとした。ただ温岐一人は方城の吏になって、遠く京師（けいし）を離れていたので、

玄機がために力を致すことが出来なかった。

京兆の尹は、事が余りにあらわになったので、法を枉(ま)げることが出来なくなった。立秋の頃に至って、遂(つい)に懿宗(いそう)に上奏して、玄機を斬(ざん)に処した。

玄機の刑せられたのを哀むものは多かったが、最も深く心を傷めたものは、方城にいる温岐であった。

玄機が刑せられる二年前に、温は流離して揚州(ようしゅう)に

往っていた。揚州は大中十三年に宰相を罷めた令狐綯が刺史になっている地である。温は綯が自己を知っていながら用いなかったのを怨んで名刺をも出さずにいるうちに、ある夜妓院に酔って虞候に撃たれ、面に創を負い前歯を折られたので、怒ってこれを訴えた。綯が温と虞候とを対決させると、虞候は盛んに温の汙行を陳述して、自己は無罪と判決せられた。事は京師に聞えた。温は自ら長安に入って、要路に上書して分疏した。この時徐商と楊収とが宰相に列していて、徐は温を庇護したが楊が聴かずに、温を方城に遣って吏務に服せしめたのである。その制辞は

「孔門以徳行為先、文章為末、爾既徳行無取、
文章何以称焉、徒負不羈之才、
罕有適時之用」と云うのであった。温は後に隋県に遷されて死んだ。子の憲も弟の庭皓も、咸通中に官に擢でられたが、庭皓は龐勛の乱に、徐州で殺された。

玄機が斬られてから三月の後の事である。

参照

其一　魚玄機

三水小牘　南部新書
太平広記　北夢瑣言（ほくむさげん）
続談助　唐才子伝
唐詩紀事　全唐詩（姓名下小伝）
全唐詩話　唐女郎魚玄機詩

其二　温飛卿

旧唐書　漁隠叢話（ぎょいんそうわ）
新唐書　北夢瑣言

全唐詩話
唐詩紀事
六一詩話
滄浪（そうろう）詩話
彦周（げんしゅう）詩話
三山老人語録
雪浪斎（せつろうさい）日記

桐薪（どうしん）
玉泉子
南部新書
握蘭集（あくらんしゅう）
金荃集（きんせんしゅう）
漢南真稿
温飛卿詩集

（大正四年四月）

底本：「森鷗外全集5」ちくま文庫、筑摩書房
1995（平成7）年10月24日第1刷発行
入力：清角克由
校正：ちはる
2001年3月6日公開
2006年4月27日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。